

1 題材名 「友だちの輪を広げよう！」 ～子どもたちのレジリエンス～

2 子どもたちの実態

本校のことばの教室に通っている吃音がある子どもたち（以下、「子どもたち」と記載）は、8名である。これまで、個別学習や8名でのグループ学習を行いながら吃音についての知識を学び、自分と向き合い、自分の気持ちや考えを詩や作文、どもりカルタ、どもりキャラクターなどに表して語ることができた。

低学年も高学年のように自分の気持ちを表現することができたのは、全学年が集まるグループ学習で一緒に話し合ったり、作品を見合ったりしてきたからであると考え。話し合いや発表の後、お互いの良さを尊重し、気持ちや考えを伝え合っている様子が見られるようになってきた。更にその中の2名は、自分のクラスでも自分や自分の吃音について語ることができた。自分のことをもっと他の人に伝え、自分らしく話したり過ごしたりしたいと子どもたちは考えている。子どもたちが自分を語り、理解をしてもらえる場を設定していけば、子どもたちの仲間が増えると考えた。自分のことを語る経験を積み重ね、自分で生きやすい環境を作ることができる子どもを育てていきたいと考える。

3 題材について

(1) 友だちの輪（仲間作り）

担当者は、子どもたちにはグループでの活動や仲間作りが必要だと考え、取り組んできた。また、本校に通っている8名以外にも仲間作りをしたいと考え、千葉市内のことばの教室に通う吃音がある子どもたちとのかかわりを行いたいと考えた。その理由としては、これから子どもたちが他者と、どのようにかかわっていけばいいのか不安に思っていることがわかったからである。まずは、同じ吃音がある子どもたちとの仲間作り、そして子どもたちが在籍しているクラスの友だちとのかかわりへと発展していきたいと考えている。そしてそのことが、今後に生かすことができるようになってほしいと願っている。

子どもたちは、他校のことばの教室に「同じ学年の吃音がある子はいるか」「他校のことばの教室では、どんな学習をしているのだろう」といろいろな想像をしていた。担当者が千葉市内のことばの教室に通う吃音がある子どもの数を調査し、91名であることがわかった。その91名との「かかわりをもちたい」「友だちになりたい」と子どもたちが思うようになった。まずは、手紙で交流のお願いをB児が書いた。その手紙に多くの子どもたちから返事が返ってきて交流がはじまった。手紙だけでなくビデオレターを作成する子どももいた。このような取り組みをくり返し、直接電話やテレビ電話で話すこともできた。交流会での出会いからまた、子ども同士のつながりやかかわりができると考えた。吃音があることで困ったり悩んだりした時に「仲間がいる」と感じることに導いていきたい。

本時は、交流会という出会いの場で知り合うという要素の中に「理解する」を含めたいと考えている。楽しい時間は、遊びのおもしろさだけでなく「わかった」「すっきりした」などの吃音に対する

思いや考えが話せたことや大きくことができた喜びを味わわせたいと思う。今後、他校のことばの教室でのグループ学習に生かしてもらい、そして、知り合えた仲間が存在が子どもたちの不安の軽減になるのではないかと考える。

(2) レジリエンス

レジリエンスのことばの意味としては、「何かにぶつかった時に跳ね返す力、弾力、元気を回復する力、立ち直る力」である。一般的な定義としては「困難な出来事を経験しても個人を精神的健康へと導く心理的特性や力」(石毛、無藤、2005)である。また、レジリエンスには、7つの構成要素(ウォーリン)があるが独自に吃音に関する構成要素として10の要素を作成した。

- ① 洞察 (気づく → 知る → 理解する)
- ② 独立性 (迷い出る → 遊離する → 折り合いを付ける)
- ③ 関係性 (結びつく → 募集する → 人間関係を作る)
- ④ イニシアティヴ (探索する → 取り組む → 生み出す)
- ⑤ ユーモア (遊ぶ → 笑う・楽しむ)
- ⑥ 創造性 (遊ぶ → 構成する)
- ⑦ モラル (判断する → 大事にする → 仕える)
- ⑧ アサーション (感じる → 表現する → 感情の適切な対処)
- ⑨ 楽観的人生観・人間観 (生き方を知る → やってみる → 希望がもてる)
- ⑩ 共同体感覚 (自己肯定 → 他者信頼 → 他者貢献)

これらの構成要素を踏まえて、私たちが取り組んでいる子どものレジリエンスは、「問題に向き合い、理解し、対処する能力」である。問題とは、吃音があることから生じる困難や悩みである。吃音には、話し方(吃音症状)の特徴があるため発話による悩みと考えられがちであるが、すべてそうであると言えない。吃音症状がほとんどみられない人が、「どもるかもしれない」と予期不安を抱えて落ち込み、悩む場合もある。その吃音症状は、かなりどもる日があったり全くどもらない日があったり変化するからである。これを「吃音の波」と言っている。吃音の波の周期は人にとって違うが、上手につき合っていこうとする人もいれば、一喜一憂をくり返しながら物事を吃音中心に考えて過ごしてしまう人もいる。

吃音症状を少しでも軽減することができれば、不安や悩みも解消できると考える人もいる。しかし、100年以上も前から吃音に関する研究が世界中で行われてきたがその成功した報告がなく、吃音を治すことも吃音症状を軽減することも難しいとされている。訓練として話すスピードを極端にゆっくりにしたり、リズムをつけて話したりする方法などあるが、日常の生活の中で活用できないものばかりである。どもってはいないが不自然な話し方を身につけさせることよりも、どもりながらその子が周囲の人に理解してもらえ環境を自分でつくることのできる力「レジリエンス」を身につけさせたいと考えている。

子どもの中にあるレジリエンスを見つけ、育てていこうとする時に、担当者が子どもの悩みや問題を受け入れ、一緒に考えたり向き合えたりできるかということが大事であると考え。そのためには、担当者自身も周囲との共感性、関係性、自己性、レジリエンスがあり、物事の価値観や人生観をもっていることが問われる。いつも子どもたちの学校生活や友だちとの関係が安定して送ることができているかを把握しながら、担当者はかかわるように心がけている。

4 指導計画

	グループ学習の活動内容とねらい
1 (5月)	今年度の学習計画について話し合うことができる。
2 (6月)	他校へのアンケート、ビデオレター、手紙で交流をすることができる。
3 (7月)	手紙の返事や電話のやりとりをしたことについての情報交換をすることができる。
4 (9月)	他校のビデオレターやテレビ電話での質問に答えることができる。
5 (10月)	他校の吃音がある子との交流会を開き、話し合い活動をすることができる。(本時)
6 (11月)	他校との交流を行った感想や、ふりかえりを話し合うことができる。
7 (12月)	交流会から広がった友だちの輪について話し合いや情報交換をすることができる。
8 (1月)	吃音カルタを作って遊び、お互いに意見交換をすることができる。
9 (3月)	個々の学習の発表や6年生の卒業を祝うセレモニーで語ることができる。

6 本時の指導と展開

- (1) 目標 ○友だちの質問に対して、自分の意見を話したり友だちの話を聞いたりすることができる。
○友だちの意見を受け入れたり賞賛したりしながら、理解することができる。

担当者	本時のねらい・目標	手立て
A児	進んで挙手し、質問に答えようとするすることができる。	「吃音ガイドブック」を用意しておく
B児	進んで質問に答え、交流会に参加した人と会話をすることができる。	詩や作文を用意しておく
C児	話し合いの中で、自分の意見を話すことができる。	どもりカルタを用意しておく
D児	交流会に参加した人と会話をすることができる。 友だちの意見をきいて、自分の意見を話すことができる。	吃音の波の図を用意しておく
E児	友だちの話をきいて、自分の意見や考えを整理することができる。	吃音まんがを用意しておく
F児	友だちの意見をきいて、自分の意見を話すことができる。 吃音パンフレットを紹介することができる。	吃音パンフレットと吃音キャラクターを用意しておく
G児	参加者の質問に対して自分の意見を話すことができる。	吃音キャラクターを用意しておく
H児	吃音についての話し合いをよくきいて、その場に交流会に参加することができる。	吃音キャラクターを用意しておく

(3) 展開

学 習 活 動 と 内 容	教師の支援 (☆T1・○T2T3T4)	◇資料 ◎評価
---------------	---------------------	---------

1 あいさつをする。	☆○参加する子どもたちが緊張している場合には、そばに座って声をかける。	
2 今日の学習の流れを知る。	☆ホワイトボードに書いてある学習の内容を示しながら伝える。	ホワイトボード
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 0 auto;"> 友だちの輪を広げよう ～友だちの質問について話し合ってみよう！～ </div>		
3 ゲームをする。 ・ジャンケンゲーム ・ハイ・イハ・ドン	○2人組でゲームをして、気持ちがほぐれるようにする。(T3)	
4 他校の参加者の質問に答える。 例 参加者：グループ学習ではどんなことをしていますか。 C：話し合ったり、遊んだりしてます。 参加者：話し方を指摘された時は、どうしたらいいですか？ C：吃音について説明します C：からかってきた人は、相手にしません。 など	○子どもたちのことばをホワイトボードに書きながら整理していく。(T3 T4) ○参加者が質問しやすいように、そばで声をかえていく(T2) ☆子どもたちが質問に答えにくい場合は、例を挙げたり、個々の取り組みを取り上げたりしながら話題を広げていく。 ☆自分の意見が言えない子には、それぞれの作品を紹介するように声をかけていく。 ☆話し合いをすることで、悩みや困っていることの対処の方法が広がることのできたことを確認する。 ☆グループ学習で話し合うことの意味や楽しさが伝わるように、子どもたちの質問や意見をまとめていく。	ホワイトボード ◎友だちの質問に対して、自分の意見を話したり友だちの話を聞いたりすることができる。
5 名前カード交換をする。	☆子ども同士が一言ことばを交わす時間は少ないが、カードをもらうことで今後の交流につながるように声をかける。	名前カード
6 ふり返りをする。	○名前カードを交換が終わったら、振り返りカードを配付する。 ☆○それぞれのことばの教室での振り返りに活用できるように参加者にも感想を書くように伝える。	振り返りカード ◎友だちの意見を受け入れたり賞賛したりしながら、理解することができる。
7 終わりのあいさつをする。	○ふりかえりカードを集める。(T2) ☆保護者に今回の学習の目的や内容について説明をする。	

	○保護者を待つ間に、参加者に声をかけて 今後の交流につながるようにする。	
--	---	--

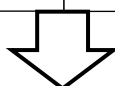
子どもの実態の捉え方とよりよい指導のあり方

きこえの教室に通っている子ども

- きこえにくさのある子
- きこえにくさについて、理解を深めたい子
- ことばの発達や社会性に遅れがある子
- きこえにくさをうまく伝えられない子

ことばの教室に通っている子ども

- 発音に誤りがある子
- 吃音がある子
- ことばでのかかわりが苦手な子
- 読む・書く・話すなどの表現が苦手な子



本校の取り組み

「子どもの実態」について

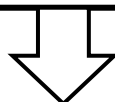
- ・ 実態についてケース会議で検討
- ・ お互いに指導を見合う。
- ・ 保護者や通常の学級担任からの情報を得る。

「よりよい指導」について

- ・ 個々の実態にあった指導（手立て）
- ・ 「できた」「わかった」を子どもが実感できる指導（評価）
- ・ 子どもの思いを大事にする指導（意欲）

本校の研究テーマ

（昨年度）：子どもたちの当事者研究を通して、「語る力」を育てる
（今年度）：自分と向き合い、語る子どもたちのレジリエンスを育てる



きこえ・ことばの教室でめざす子ども像

- 自分の問題や課題について理解できる子ども
- 自分の問題や課題に意欲的に取り組む子ども
- 自分について考え、表現する子ども

当事者とは、自分のことを研究することである。生活の中で自分と向き合い、自分のことに前向きに試行錯誤を重ねながら研究的な思考をもって取り組むことが「当事者研究」となる。どんな些細なことでも「自分自身とともに」模索していくことの大事さを子どもたちと考えていく。

本校では、子どもたちがそれぞれ自分について考えながら、意欲的に課題に取り組めるように指導を行っている。個々に自分と向き合い、課題を確認することで、自己評価ができるように指導を工夫している。

今年度は、更に「レジリエンス」をテーマに通っている子どもたちの生き方について取り組む。担当者は、どの子の問題や悩みも一緒に考え、取り組み、同行する立場でかかわるようにしたい。

今回の授業では、吃音がある子どもたちの出会いや話し合いの場を設定し、子どもたちが仲間作りのきっかけをつくりたいと思う。話し合い活動の中で、お互いの思いや考えを語り合えば、問題や悩みを自ら解決することができる力が育ち、個々に将来に希望や夢をもつことができると考える。

